

自然環境における原体験 ——教師養成への一考察——

細 野 英 夫

1. はじめに

子供は、本来自然の申し子と言われる。身近な自然の中で自己の全存在をかけて遊びに熱中しながら、自然の美しさ、神秘で不可思議な自然現象や事象を体験し、情緒的・感性的・知的経験を深めていくと考えられる。

自然からは無限の刺激が子供達に注がれている。子供達はそれらの刺激を体で感受し、内発的に知的好奇心が喚起され、主体的に自然の働きに対応しようとする。その結果、子供の自然は拡大され、変化されて、子供と自然との循環的な相互作用が機能し、子供の自然認識が構築されていくのである。

保育内容の五領域のひとつである「環境」は、幼児期までに育つことが期待される心情・意欲・態度などのねらい達成のために必要な領域のひとつである。

自然環境は広義には環境の基盤としてとらえられ社会環境もそこに含むが、今回は狭義の自然環境をもとに論述を進めることとする。

上記のねらい達成のための具体的方策として、幼児をとりまくすべてのもの、すなわち環境を幼児の体験の場としてとらえた。そして幼児期の教育を野草や樹木などの自然を材料として遊び、ヨモギを摘んで草餅をつき、そばを収穫してそば打ちをし、野菜を栽培して料理し、昆虫と遊び、兎・山羊・にわとりの世話をするという遊びと生活を基としていること、さらにこれらの体験をもとに絵をかき、話しをつくり、歌をつくるという遊びと仕事の楽

しみをもととした生活活動を基にして成立を計るものであるという視点でとらえた。

自然は社会と対比して考えられてきた客観的概念であり、もともと天然のもの、人間による改変のおこなわれていない状態のもの、すなわち原自然として把握されてきた。しかし、子供にとって自然は、遊びと生活という形態を通して体得される自然の事象や生態など環境全体を意味している。したがって、子どもと自然との相互作用の場である遊びの生活圏こそが自然と考えられる。

子供の生活圏は、子どもの自由な想像、豊かな創造、多様な発見の場であることが不可欠な要素となる。そこに「遊びこそ生命である」といわれるゆえんがあり、自然を見る目と心が生き生きと輝き意欲的でなければ、いかに自然が豊かであっても、有効な自然環境とはなり難いのである。

子供の自然を見る目と心が生き生きと輝き意欲に満ちあふれるようにするためには、保育者のリードが必要であるし、環境づくりそのものが必要条件のひとつとなる。そのためには、保育者自身の原体験こそ不可欠となる。この観点のもとに、保育内容「環境」受講学生に対して実施した原体験を目的とした野外集中実習についての結果と考察を報告する。

2. 原体験の教育的意義について

原体験（proto-experience）とは、触覚・嗅覚・味覚・視覚・聴覚すなわち五感を重視した体験のことであり、肉体による活動にもとづく体感（追っかける、むしりとる、握る、たたく、ちぎるなど）ともいえる。

次に示すのは、雨森¹⁾によってだされた原体験の類型と具体的事例である。

火 体 験……熱さを感じる、物の焦げる臭いを嗅ぐ、煙たさ、火を起こす、
火を保つ、火を消す

石 体 験……石を投げる、石を積む、きれいな石を捜す、石で書く、石器
を作る、火打ち石で火を起こす

土 体 験……素足で土に触れる、土の温もりと冷たさを感じる、土を掘る、

土をこねる、土器を作る

水 体 験……雨にぬれる、自然水を飲む、水かけ遊び、浮べる、海で泳ぐ、
川を渡る

木 体 験……木に触れる、木の臭いを嗅ぐ、木の葉木の実を集める、棒を
使いこなす、木・竹・実でおもちゃを作る

草 体 験……草むらを歩く、抜く、ちぎる、臭いを嗅ぐ、食べる、草で遊
ぶ

動物体験……捕まえる、触れる、臭いを嗅ぐ、飼う、観る、声を聞く、食
べる

情感体験……暗闇を歩く、日の出・日の入りを見る、月の満ち欠けを見る、
林を歩く、大木を見る

そ の 他……飢え、渇き

これらの原体験は、無方向性的な性格をもつ点としてとらえられるものであるから、そのひとつひとつの体験そのものを評価の対象とすること、すなわち教育的な意義をもとめることは困難であり、むしろ評価の対象と考えてはいけなとする考え方もある。しかし、子どもの遊びと生活はどれをとっても原体験の集積あるいは総合されたものであることから、自然の中での遊びと生活を通して育成された思考力・判断力・集中力・創造力など学習の基礎となるものが原体験を基として成立するものとの認識は必要となる。この認識を深めるためには、原体験の集積のし方とその結果に方向性をもたせることが必要となってくる。

自然ゲームと呼ばれる遊びの中に、目かくしをして樹木に触れ、臭いを嗅いで樹木を感覚し、次に目かくしをとってその樹木を認識するという遊びがある。この体験は、樹木という自然物を触覚・嗅覚でとらえることからスタートしている。一般に人間は情報の85%以上を視覚と聴覚で受容していると考えられているが、系統発生的にも個体発生的にも触覚・嗅覚そして味覚こそより基本的感覚なのである。

テレビジョンという視覚及び聴覚による情報は、画一的で応答のない事象

の単なる平面的なものにすぎなく、単なる知識の体系化が計られたとしても、知識を生産する機能を持つ論理的な思考力を育てることはできない。そこには触れる、嗅ぐ、味わうという情報が欠如しているからである。また、たとえ実物であってもやはり、触覚・嗅覚・味覚なくして視覚だけでは、立体的な情報とはなりえない。

科学の方法のひとつで、科学研究の基礎として重要視されている観察という活動は、五感をフルに活用して事物・現象に関する情報を収集する活動とされている。また観察は、定性的観点（色・形・手ざわり・臭い・味・音）と定量的観点（長さ、重さ、数量など）の2つの観点があるが、前者は原体験そのものであり、理科教育の重要な方法のひとつである観察という行為が原体験を基盤としてのものであることがわかる。

原体験は、それ自体評価の対象、すなわち教育的意義をもつ対象に直接なり得ないとしても基本的で重要な活動であることは事実であり、幼児期において経験することは必要なものと認識できる。要するに体全体で学ぶ活動は、子どもの心身の発達を促し、五感を鋭く研ぎすませ、感性豊かな子どもを育てることにつながるのである。それはさらに、子どもの観察力などの科学的な見方、考え方を獲得することに深くかかわることになるのである。

3. 方法について

幼児期の発達を促すのに必要な原体験は、野外体験が中心となる。また前述したように遊びと生活また遊びと仕事というように生活活動を基にして成立を計るものである。その意味では生活文化体験ともいえるものである。生活文化体験は、人間が生きていく上で必要不可欠な食・衣・住を主な教材としている点、そして環境にやさしいライフスタイルの基本的あり方を学ぶ点などから積極的に受け止める姿勢が必要である。

ここでは、「環境」受講学生に対し実施した野外集中実習をもととして方法について報告する。

1) 場 所 栃木県立南那須少年自然の家

この施設は、宇都宮市の北東約27kmの塩那大地の中心部（標高194m）にあり、総面積34,792㎡の自然環境に恵まれた広大な地にある。棲息する野鳥や多種にわたる樹木、自生する山野草の種類が多い。近くには県立酪農試験場南那須育成牧場などもあり、幅広い体験学習ができる。

主な施設を次に示す。体育館・視聴覚室・工作室・天体観測ドーム・室内料理室・キャンプファイヤー場・屋外集いの広場・トリム・樹木野草観察コース・宿泊室（200名）・食堂

2) 日 時 平成5年8月3日～6日（3泊4日）

3) 実習内容（概要）

第1日目

11時 入所（オリエンテーション） 周辺散策

12時 昼食

13時 保育内容

「環境」のねらいと内容について（講義）

子どもと自然環境とのかかわりについて（講義）～15時まで

16時 飯盒炊さん、バーベキュー（実習）

18時 入浴

19時 保育者と自然環境とのかかわりについて（講義）～21時

21時 自由時間

22時 就寝



オリエンテーション



グリーンミーティング

第2日目

- 6時 起床
- 7時20分 朝食
- 8時30分 植物・動物にかかわる活動、自然観察のし方（講義）～11時30分
- 12時 昼食
- 13時 グリーンミーティング（実習）
森林の指定されている樹木40種の特徴と名称を図鑑をもとに検索する。～15時
- 15時30分 竹トンボ作り（実習）～17時30分
- 18時 そば打ち（実習）～20時
- 20時 入浴
- 21時 自由時間
- 22時 就寝



そば打ち



自然ゲーム

第3日目

- 6時 起床
- 7時20分 朝食
- 8時30分 自然事象に関する活動、子どもの創意工夫を伸ばすための活動（講義）～11時30分
- 12時 昼食

- 13時 自然ゲーム（実習）
森林の中に入って自然と遊ぶ活動。色いくつ・音いくつ・
バードコール・大地の窓・目かくし歩き・木の鼓動など。
竹トンボ飛ばし。
トリムあそび。～15時30分
- 16時 飯盒炊さん、カレー作り～18時
- 18時30分 入浴
- 19時30分 天体観測、木星・土星・金星・月の観測～20時30分
- 21時 自由時間
- 22時 就寝

第4日目

- 6時 起床
- 7時20分 朝食
- 8時30分 数と量に関する活動（講義）
自然物（葉、種子、果実など）をつかっの数量に関する
実習～11時30分
- 12時 昼食
- 13時 清掃活動
- 14時 退所

以上は、標準日課である6時起床、22時消灯の16時間のうちより、食事・清掃・風呂・自由時間等の時間約7時間以外の9時間をもととした活動内容である。4日間合計して、講義に約13時間、実習に約16時間の時間を使用した。

4) 参加学生

今回の参加学生は、全員1年生で数は40名であった。入学時のカリキュラムガイダンスにおいて主旨及び内容を説明し、学内での通常授業か野外集中授業かどちらかを選択させた。平成6年度は49名の参加予定である。

5) 費用 使用料（1泊） 720円

朝食 4 5 0 円

昼食 5 0 0 円

夕食（定食） 9 5 0 円

バーベキュー（950円）・カレー（850円）・そば打ち（520円）

6）交 通 学バスを利用。

4．結 果

実施された野外集中実習の結果は、参加学生に対する実施後のアンケート調査によるものである。

アンケートは、次の内容によっておこなった。

① 参加して

よかった 40名、 よくなかった 0名、 その他 0名

② よかった点（自由記入法）

- 自然の中で学習でき、自然とは何かを考えることができた 12名
- 自然に直接触れることができ、体を使って学ぶことができた 10名
- 自然が人間をはぐくんでいるんだというまぎれもない事実を知ることができた 6名
- 自然は人間と同じように生きていることを実感でき、大切にしていかなければならないことが理解できた 4名
- 自然のもつすばらしさ、温かさ、やさしさを知ることができた 4名
- 本当に自然に親しんだり、観察することの意味を知った気がする 4名
- 人間の根源ともいえる経験ができた 2名
- 学友と協力し合ってやりとげることができ、信頼関係や絆が今まで以上に深まった 13名

③ よかった活動（複数記入）

- グリーンミーティング 40名
- 竹トンボ作り 40名
- そば打ち 32名

○ 自然ゲーム	30名
○ オオムラサキの観察	6名
④ 今後取り入れたい活動（複数記入）	
○ 野草での伝承遊び	40名
○ 天体観測	31名
○ 竹トンボの飛ばしっこ	26名
⑤ 今後への希望（自由記入）	
○ ひとつひとつの活動にもう少し時間がほしかった	38名
○ 座った状態での長時間の講義が疲れた	30名
⑥ その他	
○ 施設……講義用の教室がなかったのが不足だったが、他はすべて 非常によかった。	40名
○ 食事……そば打ち、バーベキュー、飯盒炊さん、けんちん汁等大 変よかった。また、宿舎の定食もよかった	40名
○ 費用……やすかった	40名
○ 日時……期日、時間の長さ等特に問題はなかった	40名

5. 考 察

自然から注がれる無限の刺激をもととした体験は、子どもの感性を耕し、その後の成長をささえることとなる。この体験こそ直接体験であり、原体験である。

草や木にふれ、臭いを嗅ぐ。竹を割り、けずって竹トンボ作る。バッタやトンボを追いかけて、つかまえる。水鉄砲を作って遊ぶ。砂山を作って遊ぶ。これらの活動は手足の働きを発達させ、脳の発達を促進させる。

メダカやオタマジャクシなどの飼育、草花の栽培は生命を育てる喜びを、そして、ときには死の悲しみを実感として伝えてくれる。このことは、人間らしい喜怒哀楽を正しく、自然に生み出すこととなる。

先に、子どもにとって自然は、遊びという生活形態を通して体得される自

然の事象や生態など環境全体を意味していると述べ、さらに子どもとの相互作用の場である遊びの生活圏こそ自然であり、そこでの遊びのなかに原体験が含まれていることを述べた。ここで、子どもにとって自然とは何か、また、子どもにとって遊びとは何かについて考察する。

子どもの遊びの生活圏としての自然について、塚本²⁾は次のように述べている「現在私たちが口にする自然を求めるということも、そのほとんどは半自然、第二の自然を意味するいわゆる人間的自然ということだと思う。例えばシバ草のある、牛が放牧されている高原とか、シラカバ林など、第二の自然であろう。野生に満ちたきびしい自然を求める者は、ごくかざられた探検家や登山者であろう。荒廃の一語につきる氷河の両側に、数千メートルの氷と雪の高い山々が深海の青さに似た色の空に並ぶありさまは、すばらしい自然の美しさである。

だが、そこは人間の住む村からは何日間もはなれ、生命といえ、南面するわずかな傾斜地にあるお花畑とそこに住むチョウくらのものである。このようなところは、人間の一時的な侵入を許しても長期間の生活を許すものではない。」

子どもにとって遊び場としての自然は、たしかに、かなり人間の手によって改変されたものとなっている。自然公園とか自然の家とかでも、豊かな自然として残され、利用されている森林は、道がつくられ、草刈りが定期的に行われているし、マムシやスズメバチの襲撃から守る努力がされているなど本来の野生に満ちた自然の持つ危険性を取り除いている。

人間と自然とのかかわりあいについて、今西³⁾は次の3つの時代区分をしている。第一の時代は自然依存時代、第二の時代は並存の時代、第三の時代は自然征服時代である。その流れは、人類が自然の中に埋もれていった時代、共存していた時代そして人類が独自の世界を創造した時代として考えることができる。人類の文明の進歩とともに、人間は自然とのかかわりあいを変化させ、自然の価値を変えていったのである。

子どもの生活圏が、子どもの自由な想像、豊かな創造、多様な発見の場で

あることが不可欠な要素であり、そこに「遊びこそ生命である」といわれるゆえんがある。子どもにとっては、遊びは生活のすべてであり本能である。さらに、自由な想像、豊かな創造、多様な発見の世界がそこにあるのであるから遊びは文化としての面をもっているといえる。

東京都内の某中学校において、「宿題のない学校」を理念としてかけ実践がおこなわれた。その時よく使われた言葉が「よく遊び、よく学べ」であった。だが、第一に学力の低下に不安をもつ教師、保護者そして生徒により数年間で中止することとなった。学校のない時間は子どもにとって自由な創造のときであるから、遊びは文化としての面をもっているから、そして遊びの中に心を育てるものがあるからという考え方は受け入れられなかったのである。むしろ遊びとは、勉強をしたら、仕事をしたらその代償として与えられる部分であるとの考えが強かったのである。日本人は、歴史的に遊びとか遊び人間を否定してきたという傾向が強かった。また「よく遊び、よく学べ」という言葉のうちには、子どもの学習と遊びが同質のものであることを忘れている懸念が存在する。子どもの世界が遊び中心の世界であることは、多くの大人の認めるところであるが、大人の持つ遊びに対する考え方が上記より脱することができなれば、その考え方は子どもの生活圏の環境として存在し、子どもの遊びそのものに大きな影響を与え、子ども自身の世界にも大きなダメージを与えかねないであろう。最近の子どもは遊ばなくなった、遊びかたをしらない、遊びの時間が少なくなったなどといわれることが多い。しかし、時間はあるが、どんな遊びをどのようにしてやるのかを知らないのではないだろうかと思われる。バブル全盛期において盛んに叫ばれたことのひとつに、労働時間の短縮と余暇時間の使い方があった。急に時間と金が与えられて、それ遊べ、それ遊べといわれても遊びを知らない人間として育てられたのであるから、うまく遊べるはずがなく、レジャーという言葉とレジャー産業の氾濫となり、おしきせの商品化した遊びを与えられたのである。

子どもの遊びが文化としての価値をもつことができるようになるためには

大人たちの持つ遊びに対する考え方を改めること、その上で子どもに遊び方を学習させる事が必要である。

文化としての遊びにするためには、まず遊びを自分で作ることである。さらに能動的に体験することによって体得することである。視覚、聴覚をもととして受動的に覚えた知識は単なる知識の集積にすぎない。

子どもの遊びを本物とする一つの方法として、自然の中で遊ぶことがある。塚本⁴⁾は、「私たちが子どもの遊びを正しく指導していく一つの方法として、自然活動を押し進めることになるが、それは自然の中で遊ぶのではなく、自然の中での生活によって遊びを作ろうというのである。」とし、遊びによって作られたいろいろのものは、自然の中での生活に役立ち実用となり、楽しく遊びながら生活に必要なものを作ることの必要性について述べ、遊び——生活のシステム化を主張している。具体的には、ゲームを楽しくやりながら、自然と体力や運動感覚をやしなっていこうという方法はそのひとつである。

自然の中での遊びが、五官（感）を使って成立し、より確実なものとなることを考えれば、より多くの原体験が必要となり、その原体験はより豊かな自然の中でこそ有効なものとなる。

子どもと自然とのつながりを生きたものとし、その中から本物の遊びを体得するためには、保育者養成の段階で学生自身に原体験をふくめた自然との直接ふれあいをもととしての活動を体験させることは必要不可欠なものと考えられる。

今回の実習で参加学生が体得したと期待される事柄を要約する。

- 1) 直接体験を通して、自然環境の諸事象に興味と関心を深めることができた。
- 2) 自然環境としての生態系に対する認識を深めることができた。
- 3) 人間に対する環境の役割について考えることができた。
- 4) 子どもにとって適切な遊び空間作りを考えることができた。
- 5) 自然遊びの具体的な方法を体得することができた。
- 6) 生活文化体験としての遊びと生活について体得することができた。

- 7) 共同生活の必要性和その中での他者への配慮の基準を体得することができた。
- 8) 子どもの創意工夫を引き出す方策を、直接体験を通して考えることができた。

6. おわりに

ユネスコと国連環境計画（UNEP）は、1975年以降共同で、環境教育計画の実施に取り組んできている。その背景には経済発展を最優先とし先進諸国の諸活動の結果、地球的規模での環境問題の広がりとその対応としての1972年にストックホルムで開かれた国連「人間環境会議」、1992年にリオデジャネイロで開かれた地球サミット「環境と開発に関する国連会議」等がある。

現在、環境問題は緊急的、対症療法的に解決をせまられているものと、次代にいたる長期的展望を要する課題への取り組みとの両者をあわせ持つ二重構造をもっていると考えられる。「環境教育」は特に後者の範囲での対応として重要になる。

保育内容「環境」は、環境教育そのものではない。幼稚園教育を環境による教育としていることからわかるように、この場合、子どもの発達と教育に必要なものとしての環境という意味である。他方、環境には子どもが学ぶ対象としての環境が考えられる。しかし、両者は別々な異質なものとして把握するのではなく、表裏一体のものというよりは、車の両輪としてとらえることが必要であろう。その意味で、保育内容「環境」及び野外集中実習が環境教育の一翼を担うものと考えられる。その具体的方策については、これからの課題としてとらえている。御指導、御教示を切に願います。最後に、実習にあたり、多大なる御苦勞をいただいた南那須少年自然家の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

【引用文献】

- 1) 雨森良子「幼児期における原体験」1993年 全国保母養成研究大会
- 2) 塚本圭一「自然活動学のすすめ」1980年 岳書房
- 3) 今西錦司「自然と山と」1971年 筑摩書房
- 4) 塚本圭一「自然活動学のすすめ」1980年 岳書房

【参考文献】

- 石原 寿「自然と人間」1985年 法政大学出版局
- 川合真一郎、山本義和「明日の環境と人間」1993年 化学同人
- 沼田 真「環境教育論」1989年 東海大学出版局
- 北野日出男、木俣美樹男「環境教育論」1992年 培風館
- 高橋哲郎他「子どもの発達と環境教育」1993年 京都・法政出版
- 降旗信一「自然案内人」1992年 ほろぶ出版
- ジョセフ・B・コーネル、金坂留美子訳「ネイヤヤーゲーム」1992年 柏書房